

## 滋賀短期大学令和2年度入学式式辞

今朝は夜来の雨も上がり、校門の桜がみなさんを迎えるように満開になっています。新入生のみなさん、入学おめでとうございます。ようこそ滋賀短期大学へ！

学長として、本学の教職員、在校生を代表して心から歓迎いたします。

同じくご両親やご家族のみなさんも、おめでとうございます。大事なお子様を、二年間この滋賀短期大学にお預けいただけることにお礼を申し上げます。全教職員、二年後には入学生のみなさんが、希望をかなえしっかり自立した社会人になって卒業できるように、全力を尽くす所存でございます。

そして本日、入学生のみなさんのために、ご多忙の中をご臨席いただいているご来賓の方々にも心から御礼を申し上げます。日頃から厚いご支援をいただいております。本日もお運びをいただきまして本当にありがとうございます。新しい入学生を迎えて本学も思いを新たにして様々な課題に取り組んでいきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

現在、新型コロナウイルスの感染拡大のため、大学でも入学式を中止したり、開講を大幅に延期しているところがありますが、本学ではガイダンスの予定を変更したり、式典のかたちを変更したりしていますが、入学式に続いて新入生として必要なガイダンスは行い、できるだけ早く滋賀短大生としてスタートをきってもらおうと思っております。

感染症の拡大がいつ終息するか予断を許しませんし、一段落するまで日常生活にも注意がいりますが、せつかく新しいスタートを切ろうとしている皆さんは、この事態に負けることなく、勉強も学生生活も、はじめの一歩をしっかりと始めてください。

さて本日皆さんにお話ししたいのは、本学の母体である純美禮学園についてです。今年、令和2年(2020)、滋賀短期大学は滋賀女子短期大学として創設されてから50年になるのですが、純美禮学園の創立は、102年前の大正7年(1918)4月に中野富美先生が開かれた松村裁縫速進教授所からとしています。いま世界は対ウイルス戦争の真最中ですが、1918年というのは1914年に始まった第一次世界大戦がようやく終焉を迎えようとしていたころでした。またちょうどスペイン風邪とよばれているインフルエンザが世界的に流行し始めたころでもありました。世界は軍隊による戦争と、見えないウイルスに対する戦争とで疲れ果てていました。このスペイン風邪で亡くなった人は、世界大戦でなくなった人よりも多く、ヨーロッパ各国で戦争が続けられなくなったことも世界大戦が停戦に向かった原因の一つといわれているほどです。

そんな時に生まれた裁縫速進教授所とはどんな学校だったのでしょうか。当時、中野富美先生は大津市下北国町(今の三井寺町)に住んでおられ、その二階を教室にしてこの裁縫所を開いたのですが、最初の生徒は7名だったそうです。翌年には大津裁縫速進

教授所と名前も変わり、生徒も 38 名に増えていました。

裁縫学校というと、文字通り裁縫だけを教えていたように見えますが、中野先生の裁縫を通じて真の人間を育てるという理念に従い、技術としての裁縫だけではなく、礼儀作法、修身（道徳）や作文も授業科目に入っていました。裁縫所では「一、何事も真実に生きる心。一、女性として誇りを持つ人になる心構え。一、立派な技を磨き不撓不屈の精神を持つこと。」という三つの教訓をいつも説かれたそうです。

少し後になりますが、昭和 2 年につくられた案内には、「当裁縫所は品性と能力とは車の両輪の如くであるとの信念に基づき、第一に女性としてのうるわしい精神の涵養に意を注ぎ、この精神に培われた技能をみがき（の錬磨をはかり）、両者がいっしょになって（相俟ちて）立派な夫人の人格を築き上げることを日頃の念願としております。」と書かれています。心と技の両方の育成をめざすという理念は、本学が建学の精神として掲げている「心技一如」ということばに集約されています。

そもそも裁縫というものは布を裁断して縫うことにより衣服を作ることであり、中国の古典には早くから出ている用語です。日本でも古代から裁縫を専門とする役所が都の中にありまして、源氏物語などにも裁縫あるいは裁ち縫いという言い方が見えています。人々の生活の一番基本である衣食住の衣の部分、文化の重要な要素として発達してきたことがわかります。

そして裁縫は家庭で必要とされる技術であると同時に、女性が社会的に自立するための職業としても、近代以前から定着していたようです。江戸時代に女性が独立して行える職業というのは、今のように豊富ではなく、髪結い（現在の美容師）、産婆など限られていたのですが、裁縫も女性が得意の分野を生かした職業として定着していました。これを御物師などと呼んでいました。

明治の近代的教育制度の中で、この裁縫は女子教育に必要な教科として小学校の科目に家事・裁縫科として取り入れられるようになります。そして小学校を卒業した女子がより進んだ教育を受けようとしても、それに対応する学校は少なく、そういう女子を受け入れたのが各種学校と呼ばれた学校で、その一つが中野富美先生も入学した東京裁縫女学校という学校でした。これは日本で裁縫教育の先駆者といわれる渡辺辰五郎先生が創設されたもので、現在の東京家政大学の前身です。中野先生はここで 17 歳から 2 年間、最新の洋裁まで含めた裁縫について体系的に学ばれました。

このころ東京裁縫学校以外にも、女子教育を目的とした学校がいくつも生まれました。東京では今の跡見学園女子大学の前身である跡見女学校、戸板女子短期大学の前身である戸板裁縫学校などが、名古屋では今の椙山女学園の前身である名古屋裁縫女学校、滋賀県でも八日市に今のびわこ学院大学の前身である和服裁縫研究所が生まれています。いずれも単に裁縫技術を教えるのではなく、新しい時代にふさわしい社会人としての資質をもった女性を育てるという理念をかかげていました。

このように明治から大正にかけて生まれた裁縫学校というのは、新しい近代女子教育

の担い手として先駆的な役割を果たし、それが今日の高等教育につながっているといえるのです。中野先生の天津裁縫速進教授所は、その後、昭和3年には天津裁縫女学校として認められ、昭和6年には天津高等裁縫女学校に昇格するなど、名実ともに私立学校として発展していくこととなります。現在の純美禮学園の名のもとになる純美禮会という同窓会も、この少し前に生まれています。

現在の滋賀短期大学は、生活学科・幼児教育保育学科・ビジネスコミュニケーション学科という3学科があり、12年前の平成20年(2008)には男女共学化しています。しかし中野富美先生の裁縫学校にこめられた教育の理念は建学の精神として今もいかされています。それは最初に述べたように「心技一如」、すなわち学校で学ぶ知識や理論と、それを実現する技能や技術を一つに合わせるといふ姿勢であり、そこで取り組むのは、どうすれば人々の豊かな生活を実現できるかとか、どうすれば子どもたちが健康で豊かな感性をもって育っていくのかとか、どうすれば複雑なビジネスやコミュニケーションの世界が円滑にまわっていくのか、など現代社会の最も基礎的であり実践的な課題です。当初はこれらの分野は女子教育のためのものとされていましたが、いまでは男女にかかわらず取り組む意義のある分野であることはいままでもないでしょう。むしろ男性にこそ取り組んでほしい分野であるといえるのではないかと思います。

短期大学というのは2年という短い期間ではありますが、その間に今お話ししたような心と技を学んでもらいたいと願っています。繰り返しになりますが、不安な状態がしばらく続くとは思いますが、こういう時だからこそ、しっかりした目と耳をはたらかせ、自分で考えたやりかたでたくましく乗り切ってください。みなさんの力が豊かな学園生活を実現することを念願して式辞といたします。

令和2年4月2日  
滋賀短期大学  
学長 秋山元秀